

# 通信宝箱

平成20年  
5月号

## 今月のHOTニュース

## あなたのカーナビは大丈夫？

社団法人日本損害保険協会が行った『自動車盗難に関する自動車ユーザーの意識を調査するアンケート（調査期間：2007年9～10月、回答者26,189名）』、『2007年度自動車盗難事故実態調査（調査期間：2007年11月1日～11月30日）』によれば、カーナビの被害が増加しているそうです。そこで今回は、双方の結果報告から車上ねらいを中心にまとめました。

### ◆自動車盗難発生場所（車上ねらい）

盗難発生場所		自宅（屋内）	自宅（屋外）	契約駐車場（屋内）	契約駐車場（屋外）	コンビニ・スーパー駐車場	通勤先駐車場	空き地	路上	その他	合計
2005.11 調査	支払件数	127	968	56	911	159	203	21	142	634	3,221
	構成比	3.9%	30.1%	1.7%	28.3%	4.9%	6.3%	0.7%	4.4%	19.7%	100%
2006.11 調査	支払件数	91	823	44	886	135	147	14	100	444	2,684
	構成比	3.4%	30.7%	1.6%	33.0%	5.0%	5.5%	0.5%	3.7%	16.6%	100%
2007.11 調査	支払件数	103	1,000	42	987	139	138	16	116	597	3,138
	構成比	3.3%	31.9%	1.3%	31.5%	4.4%	4.4%	0.5%	3.7%	19.0%	100%

### ◆車上ねらいにあうかもしれない不安を感じたことは？

	よくある	ときどきある	まったくない
車上ねらい	22.0%	61.7%	16.3%
自動車盗難	11.0%	52.4%	36.6%

「よくある」「ときどきある」という回答が、自動車盗難は52.4%に対し、車上ねらいは83.7%と危機意識が高い。

### ◆車上ねらいの被害品

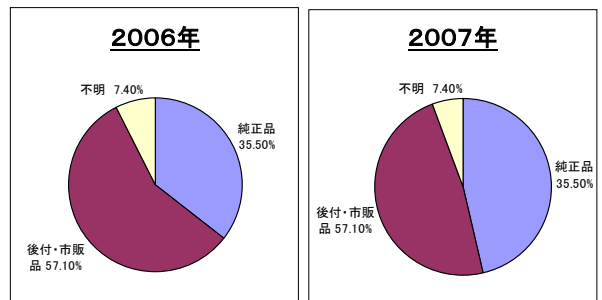
被害品	2006年11月調査		2007年11月調査	
	件数	構成比	件数	構成比
カーナビ	1,299	39.2%	1,440	41.0%
バッグ類	258	7.8%	293	8.3%
金銭・カード	168	5.1%	233	6.6%
外装部品（バンパー・ドアミラー）	315	9.5%	229	6.5%
CD・MD・DVD等（ソフト）	168	5.1%	168	4.8%
オーディオ	198	6.0%	167	4.8%
タイヤ・ホイール	164	5.0%	137	3.9%
スポーツ用品	137	4.1%	129	3.7%
その他	603	18.2%	715	20.4%

\*「その他」は衣料品類・パソコン等・運転免許証・携帯電話等を含む

### カーナビの盗難防止対策としては・・・

- ①カーナビにカバーをかけ、外から見えないようにする。
- ②カーナビの製造番号を保管・登録する。
- ③取り外せるカーナビは自宅に持ち帰る。
- ④起動時に暗証番号を入力するカーナビを利用する。  
..... などがあります。
- ①②は手軽に行いやすい対策なのでぜひ実践しましょう。

### ◆カーナビ種類別被害



### ◆車上ねらいの対策は？

クルマから離れるときは必ずキーを抜いてロックしている	96.6%
車内に現金や身の回り品などを置かない	93.8%
見通しがよく、照明設備が整った駐車場を利用している	71.4%
カーナビ、車載テレビなどは外から見えないようにしている	31.8%
カーナビの製造番号が記載された保証書を保管している	29.6%
取り外したり、携帯可能なポータブルカーナビを活用している	9.6%
起動時に暗証番号等を入力するカーナビを活用している	4.2%

約95%が「クルマから離れるときは必ずキーを抜いてロックしている」、「車内に現金や身の回り品などを置かない」と回答し、約70%が「見通しのよい照明設備が整った駐車場を利用している」と回答。しかし、被害が増えているカーナビの盗難防止対策については、「カーナビ、車載テレビなどは外から見えないようにしている」、「カーナビの製造番号が記載された保証書を保管している」などの対策を講じているのは30%程度。また、「取り外したり携帯可能なポータブルカーナビを活用している」、「起動時に暗証番号等を入力するカーナビを利用している」などの対策は10%に満たないなどカーナビの盗難防止対策を講じているのは多くない。

出典：社団法人 日本損害保険協会HP <http://www.sonpo.or.jp>

～自動車保険のご加入はお済みですか？詳細は裏面代理店までお問い合わせください～

## 交通安全のポイント

ドライバーの皆さんのなかには、脇道から自転車が飛び出してきてヒヤッとしたとか、歩行者がいきなり道路を横断してきてドキッとしたという体験を持つ方も多いでしょう。実際、交通状況にはさまざまな危険が潜んでいます。事故を起こさないようにするためには、交通状況に潜む危険を的確に予測して、それを回避する運転を実践することが大切です。そこで今回は、危険予測運転について考えてみることにしましょう。

### ■よく「みる」

危険を的確に予測するためには、まず周囲をしっかりと「みて」、状況を正しく把握しておくことが不可欠の条件となります。注意すべき対象を見落としたり見誤ったりすれば、的確な予測はできないからです。

しっかりと「みる」ためには、脇見運転や漫然運転をしないということはもちろんですが、一時停止が必要な場所では、しっかり止まって、はっきり確認するということが重要なポイントになります。



### ■危険は変化する

運転中の危険は常に同じではなく、刻々と変化します。

下図1は、自車は交差点に接近し、左折するつもりで進行しています。前方左側の歩道を自転車が行っています。自車が①のときは、自転車が車道に出てこないかどうかに注意する必要がありますが、接近し左折しようとする②の位置ではどうでしょうか。この時点では自車は自転車を追い抜いて前方の視界からは消えていると考えられますが、視界から消えているからといって危険も消えてしまったわけではありません。自転車の存在を忘れてそのまま左折すると、横断歩道を進行してきた自転車と衝突する危険があります。このように同じ対象でも、状況の変化に応じて危険の様態も変化するという点に留意する必要があります。

下図2は生活道路を走行している場面です。前方左側に歩行者がおり、右側の路地から自転車が道路に出ようとしています。前方には見通しの悪い交差点があり、その先には駐車車両があってその付近に歩行者がいます。自車は交差点を直進するつもりで進行しています。

まず、自車が①のときには、前方の歩行者に注意が必要です。また、右側の路地から自転車が出てようとしていますから、自転車の動きにも注意が必要です。

②の位置では、交差道路の状況が確認できませんが、車や自転車などが出てくるかもしれません。見通しの悪い交差点は徐行して進行する必要がありますが、安全を確保するためには、できるだけ一時停止をして、左右の安全確認をするのが望ましいでしょう。なお、徐行や一時停止をする際に、急な減速や停止をすると後続車に追突される危険がありますから、徐々にスピードを落とし後続車に減速や停止の意図を早目に伝えることが大切です。交差点を通過した③の位置では、交差点の先の駐車車両付近の歩行者に注意が必要です。特に子どもの場合は駐車車両に隠されて見えにくく発見が遅れがちになります。したがって、駐車車両を通過するまでは徐行して進行するのが安全な方法です。

このように交通状況における危険は次々に変化していきますから、運転中は決して気を抜けません。常に周囲の状況をしっかり見て、起こりうる危険を予測した運転を心がけましょう。

### ■見えない危険を予測する

危険は常に目に見えているとは限りません。例えば、見通しの悪い交差点では、交差道路側の車や歩行者は見えませんし、見通しの悪いカーブではカーブの先の状況が見えず、対向車や駐車車両等の有無が把握できません。また、対向右折車が大型車の場合などは、その側方を進行してくる対向直進車は見えにくいものです。こうした見えない部分（死角）に潜んでいる危険を予測する必要があります。

### ■相手の特性を理解しておく

例えば、前方を高齢者の乗った自転車が走行していて、その先にT字路があるような場合、「高齢者は身体的な制約により首を回して後方を見るのが難しいため、高齢者の乗った自転車は後方確認しないで進路変更することがある」という特性を知っていれば、「自転車はT字路に入ろうとして、後方の確認をせずに右折してくるかもしれない」と予測することができます。そのため、スピードを落とし自転車の動きに注意するなどの危険回避措置をあらかじめ講じることができますが、そうした特性を知らなければ、「後方の確認もせずに横断してくることはないだろう」と判断してそのまま進行するでしょう。どちらが事故につながりやすいかはいうまでもありません。このように相手の特性を知るといことは、危険予測のための必須条件といえます。

### ■自分の状態もチェックする

的確な危険予測を行うためには、自分自身の状態もチェックしておく必要があります。飲酒運転が許されない行為であることはいうまでもありませんが、疲労した状態での運転も注意力や集中力を低下させ、危険を見落としたり判断を誤らせたりしますから大変危険です。また、イライラしたりカッカした状態も正常な認知や判断を妨げます。したがって、運転中は常に平静さを保ち、心身ともに良好な状態でハンドルを握るということが大切です。

図1

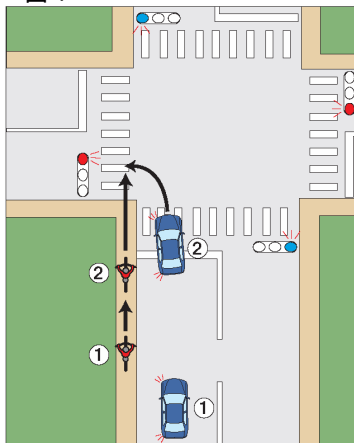


図2

